

南予推進ブロック 研究報告

八幡浜市立白浜小学校、江戸岡小学校、愛宕中学校

1 取組の内容（概要）

八幡浜市では、20年以上前から、中学校区内の小・中学校によるブロック研究が行われている。そこで、ブロック研究で設置している3部会の一つである学力向上部会に、本事業の取組を位置付け、研究を進めてきた。

小学校における年間35時間の外国語活動では、英語ノートを活用して活動が行われる。英語ノートで扱われる言語材料は、全て中学校でも再度学習されるが、小・中学校それぞれの目標設定やアプローチの仕方は異なってくる。そこで、小・中学校が連携を深め、外国語活動や、英語科の学習に関する情報交換を行うことで、現状を把握しながら、1年間の実践研究を行った。

次の内容を研究の柱として、研究に取り組むこととした。

- コミュニケーション能力育成のための指導の在り方
- 評価の在り方
- 小・中連携の在り方

本事業の指定により、外国語活動の具体的な学習内容や児童の実態を知ることができ、教員の授業に対する意識を変容させるよい機会となった。また、小・中学校教員によるT・Tや、小中合同授業を実施することで、小・中連携の新たな方向性を見いだすことができ、小・中連携の重要性を再確認することができた。今後も連携・協力しながら、ブロックの児童生徒を育てていきたい。

2 実践内容及び成果等（○成果、●課題）

(1) コミュニケーション能力育成のための指導の在り方

① 効果的なチーム・ティーチングの在り方の研究

A L Tのネイティブ・スピーカーとしての特性や中学校教員の専門性を生かして、協力して授業を行った。

② 「聞くこと」を重視した学習展開

小学校では、児童が英語を「聞くこと」に十分慣れ親しんでから「話す」活動に入るように心掛けた。中学校においても「聞くこと」にある程度慣れてから、「話す」「読む」「書く」などの活動に入るよう、学習展開を工夫した。また、小学校では英語の絵本の読み聞かせを行い、音声に意識を集中させる時間を設け、英語を聞こうとする態度の育成にも努めた。

小学校からクラスルームイングリッシュを聞いて、基本的な表現に慣れ親しんでおくことも、中学校で用いられるクラスルームイングリッシュを抵抗なく受け入れるために有効である。

③ 学習形態の工夫

ペアやグループ活動を効果的に取り入れて、体験的なコミュニケーション活動を行い、児童生徒の伝え合い、学び合おうとする意欲の向上に努めた。ペアやグループを活用し、友達と話す必然性を意図的に作ることで、一人一人が英語を聞いたり、話したりする機会が増えた。また、積極的に相手に関わったり、助け合ったりすることで相手との関係を円滑にする態度が身に付き、英語を学ぶための学習習慣形成

にもつながった。

- ALTとのT・Tは外国語に対する児童生徒の関心を高めたり、ネイティブスピーカーの発音に触れさせたりする上で、効果的であった。また、小学校教員と中学校教員とのT・Tは児童に英語学習への見通しをもたせたり、小・中の連携を図ったりする上で有効であった。
- 「聞くこと」を重視した取組によって、「聞くこと」に対する意識が高まり、聞くようになる態度が身に付いてきた。
- ペアやグループ学習を取り入れ、互いに伝え合う活動を工夫することでコミュニケーション能力の育成につなげることができた。
- 楽しいだけの活動で終わらないように、指導の目標を明確にして意味のある活動にするための工夫や努力を続けていきたい。

(2) 評価の在り方

- ① 小学校外国語活動と中学校外国語科の評価の観点と趣旨の関連性と相違点の理解
小・中共通の評価の観点であるコミュニケーションへの関心・意欲・態度について理解を深めた。
 - ② コミュニケーションへの意欲を高める評価の工夫
振り返りカードを活用し、児童が自分や友達の活動を振り返ったり、感想を伝え合ったりすることで、互いを認めたり、意欲を高めたりすることに役立てた。
また、教師が授業中の児童の様子をしっかりと見取り、振り返りカードにコメントを書いたり、授業の終末で良かった点をほめたりすることで、次時の活動への意欲化を図った。
- 振り返りカードの活用は、その時間の活動が明確になるとともに、次の時間への意欲をもつことにつながり、大変効果的であった。
 - 振り返りカードが形式的なものにならないように努めるとともに、自由記述を大切に自己評価を活用し、外国語の活動や学習を通してどのような気づきがあったのかといった評価を行い、次の指導に生かしていかなければならない。評価をする時期や記述方法の工夫が今後の研究課題である。

(3) 小・中連携の在り方

- ① 情報収集と情報交換
 - ア 小学校外国語活動と中学校外国語科の系統性や違いの理解
音声中心から音声と文字へ、「聞くこと」「話すこと」から「読むこと」「書くこと」を加えた4技能へ、慣れ親しみから定着へ、コミュニケーション能力の素地から基礎へとつながる、小・中の連続性を意識して指導に当たることの重要性を確認した。
 - イ 小・中の指導内容の相互確認
小・中の指導内容を互いに把握するため、各校の年間指導計画の交換を行い、それぞれの学習内容や指導の時期、指導方法について共通理解を図った。
 - ウ 相互授業参観の実施

小・中の授業を互いに知るため、小学校教員が中学校へ、中学校教員が小学校へ出向いて普段の授業を参観し合った。

② 児童生徒、教員間の交流

ア 小学校外国語活動への中学校教員の参画

中学校教員が小学校へ出向き、小学校教員とのT・Tによる授業を行った。

イ 中学校でのブロック交流活動

ブロック研究の取組の一環として、例年行っている小学校5・6年生と中学1～3年生との3校のふれあい行事(SEAフェスタ)の中に、英語を使って小・中学生が交流できる場を設定した。

ウ 小中交流授業(小学校6年生と中学校1年生、教員との交流)

- 情報収集や情報交換によって小学校外国語活動や中学校外国語学習について互いの理解が深まった。
- 小学校教員と中学校教員によるT・Tやブロック交流活動等によって、児童生徒、教員間の交流を図ることができた。
- 小・中連携の一環である小中交流授業の実施は、打合せなど大変な面も多いものの、コミュニケーションに対する児童生徒の意欲を高めるためには効果的であった。
- 小・中連携カリキュラムを作成することで、つながりが明確になった。
- 研究の方向性を明確にするために、年度当初に実施学年や時期を検討し、学校間の調整を行い、計画的に交流を進めていきたい。
- 作成した連携カリキュラムを基に、小学校教員は見通しをもたせる指導を、中学校教員は外国語活動が生きる指導をしていかなければならない。

3 成果のあった取組事例

(1) 小中交流授業(小学校6年生と中学校1年生、教員との交流)

① ねらい

- ・ 小・中学生が英語を使って共に活動することで、ブロック内の連帯感を深め、コミュニケーションへの意欲を高める
- ・ 中学生が既習の英語表現を使って、小学生に分かりやすく工夫して学校紹介をすることによって、小学生に入学への期待と英語学習への意欲をもたせる。

② 実践内容

ア 主題 「学校紹介をしよう」(H24. 1月実施)

イ 目標 中学生：既習の表現を用いて、教科や部活動、行事など、自分たちの学校について相手に分かりやすく伝えようとする。

小学校：中学校生活の様子について意欲的に聞いたり、質問に答えたりして、中学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとする。

ウ 展開

(ア) あいさつ・自己紹介

(イ) ウォーミングアップゲーム

(ウ) 学校紹介

- ・ デモンストレーション
- ・ 教科、部活動、学校行事で各2グループに分かれ、英語での学校紹介を通じた児童と生徒のコミュニケーション活動

- (エ) 振り返り、感想発表
- (オ) あいさつ

③ 合同授業の成果と課題

初めての交流授業で、児童生徒の緊張は想像以上であった。あいさつ・自己紹介、ウォーミングアップゲームでの児童生徒の活動は非常に消極的で、同じカードを持つ相手が見つからないまま、ゲームを終わらせることになってしまった。ゲームについては、全体を2グループに分けて実施するなどの手立てが必要であった。

学校紹介の活動では、小学生に分かってもらおうと、大きな動作をつけて、生き生きと学校紹介や質問をしている中学生の姿が見られた。また、小学生は中学生の学校紹介や質問を真剣に聞いて、答えようとしていた。中学生からは、「良い経験になった。」「また、このような活動をやりたい。」「小学生が分かってくれて、ちゃんと答えてくれたので、とてもうれしかったし、びっくりした。」など、小学生からは「中学生が緊張を解いてくれた。」「分かりやすく教えてくれた。」「中学校に入って英語を勉強するのが楽しみになった。」など、ねらいに迫る感想が多く見られた。小・中の連携を進め、コミュニケーションへの意欲を高めるのに効果があったと考える。